

エッセイ

「よその大学」—— 研究の現況

清水 哲也

国立大学の法人化や統合の問題などが現実化して来ると、一体、「よその大学」の研究の現状はどうなっているのだろうかという点が、かなり気になって来るところである。

先般、機会があって東北大学博士学位記授与式に父兄の一人として出席する機会をえた。

式場は仙台国際センターで、1,000名収容のホールであったが、博士の学位を授与された者は、587名（博士課程531名、論文博士56名）で、関係者、父兄を入れると、博士学位記授与式であるにもかかわらず、まさに立錐の余地がなく、後方には立見の人垣さえできるほどであった。

このうち医学研究科の学位被授与者数は実に110名で、私どもの旭川医大では、私の知る限り、博士学位記被授与者数は多くて30名内外で、昔の第3会議室で、いわばひっそりとした雰囲気の中で執り行われたものであって、「医学研究」の実情というものは、数ではなくて質にあることは当然であるが、東北大医学研究科修了者数の多さに仰天したものであった。

ところで、「大学ランキング2004年版」（朝日新聞社）の抜粋が週刊朝日 5/2・9 合併増大号（P160～161）に小林哲夫氏によって下記のように記載されている。

「学術情報データベースの構築・提供 ISI 社は、世界中の実績がある学術誌に（当該大学）の研究者の論文がどのくらい引用されたかという集計を取っているが、ISI での論文引用度が高い大学は、東大、京大、阪大、東北大の順で、東北大の上位進出が目を見くとのべている。

「質」の高い論文は、やはり「数」という基盤に濃密な関係があるのであろう。

しかし相手は旧7帝大、「新設医大」が逆立ちしたって勝負にならないことは自明の理である。

そこで思い出されるのが、「いずみ」6月号（2003

年）の「近況近影」欄に書かれている旭川医大皮膚科学講座の飯塚一教授の座右の銘、一愚公移山一である。同教授の解説によると、昔、愚公という老人がいて、家の前にある山を崩そうと「もっこ」をかつぎ海に捨てに行ったが、1回捨てるのに半年もかかったために、近くにすむ知叟という者が嘲笑したところ、愚公答えていうには、「自分が死んでも子々孫々絶えることなく続ければ、いつか必ず山を崩すことができる」と。

いまふうにいえば、slow, but steady ということか。

「あせらず、あきらめず、みんなでゆっくりでも着実にやろうという発想は、最後にものをいう」と教授は解説している。

7月9日に国立大学法人法案が参議院を通過、その結果、民間的発想による経営手法の導入、大学運営に対する学外者の参画、弾力的な人事、第三者評価と矢継ぎ早の変革「秋」を迎えるに至った。

一方、また直近の北大では道新の6月11日号（9ページ）によると産学官の研究組織、施設が集積する北大・北キャンパス地域の関係機関で組織する「北大北キャンパス・周辺エリア産学官連絡会」のHPが開設されたと報道している。

久保良彦前学長の退官記念講演「変革のはざま」流にいえば、旧7帝大の奔流の「はざま」でわれわれ新設医大の文字通り「身の丈」に合った変革ないしは改革とは？、まさに身の引き締まる思いに満ちた「命題」である。

（旭川医科大学元学長）